

Title	日本語名詞修飾節の習得と教育上の課題ーエジプト人中級日本語学習者を中心にー
Author(s)	Mostafa, Magdy Noran
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89503
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (Noran Magdy Mostafa)

論文題名 日本語名詞修飾節の習得と教育上の課題
—エジプト人中級日本語学習者を中心に—

論文内容の要旨

日本語を学習する際に、単文から複文への移行及びより高度なディスコースへの参入に名詞修飾節の習得が必要不可欠になる。しかし、アラビア語母語話者を対象に名詞修飾節の習得過程や習得をめぐる課題を調査した研究は管見の限り、見当たらない。そこで、本研究ではエジプトの国立大学における日本語専攻の学習者を対象に名詞修飾節の習得をめぐる課題を調査し、その解決に向けて考察を行った。

はじめに、第2章で日本語の名詞修飾節の特徴を簡潔にまとめたうえで、英語とアラビア語と比較した。英語を含めた理由はエジプトの大学では主に英語の解説や語彙が付いている教材が使用されるためである。比較をする際には、修飾節の特定、被修飾名詞と修飾節の関連性、修飾節の明示性という3つの観点を軸にした。そして、それぞれの言語を訳す際の置き換えに注目した。具体的にはどのような名詞修飾節が関係節に置き換えられるかや、外の関係という名詞修飾節の一種がどのように扱われるかなどを検討した。

次に、対象者の学習状況に注目した結果、翻訳活動が重視されていることがわかった。そのため、第3章では、翻訳活動が重視されるようになった背景、全体的なカリキュラムの特徴、学習者を取り巻く環境（日本語学習動機や教育現場の課題）などを検証した。そして、アンケート調査を通して、授業外学習の有無や学習者の得意及び不得意な活動などを調べた。以上の事項を明らかにしたうえで、名詞修飾節が学習される時期、学習される際の教材、解説の問題点などを示した。

その後、第4章では、名詞修飾節の習得過程及び習得をめぐる課題に関する先行研究を概観し、どのような過程や課題が対象者に当てはまる可能性があるのかを検討した。また、対象者が少なくとも2年間の翻訳活動に従事しているため、翻訳活動が習得過程に与える影響についても検討した。

第4章で、エジプト人日本語学習者のようにJFL環境で日本語を学習する場合は教材の影響が強く見られる可能性が明らかになった。そのため、第5章では教材の影響を調査した。その結果、使用される教材が及ぼす影響として主に表現の制限と解釈の制限の2つが浮かび上がった。表現の制限とは、名詞修飾節以外の課で学習される内容と名詞修飾節を結び付けるような示唆や名詞修飾節の応用をするような課が見られなかったことである。解釈の制限とは、日本語の名詞修飾節の見方が「名詞修飾節＝関係節」と強く印象付けられることで名詞修飾節をほかの表現に置き換えることが思い浮かばないことである。実際にNoran(2019)で翻訳調査を実施した際にも、多くの学習者は名詞修飾節を関係節のみに置き換えていた。

第6章ではNoran(2019)に続いて、再度翻訳調査を行った。本調査では、翻訳タスク後にフォローアップインタビューを加えた。また、外の関係というタイプの名詞修飾節を含めた。しかし、難易度が高くなりすぎないように、名詞修飾節を埋め込む位置に配慮した。つまり、名詞修飾節を主に最も易しいとされる文頭に埋め込んだ。調査の結果、関係節の使用が不要な場合でも名詞修飾節の一部を工夫して関係節に置き換える現象が見られた。他にも、教材で使用頻度が最も低いタイプの修飾節が最も誤答率が高った。すなわち、教材の影響を確認できた。

最後に第7章で各章で確認できた名詞修飾節の習得をめぐる課題の解決に向けた考察をした。その結果、実施されている①～③の学習にa～iのステップを加えるのが有効であることが示唆された。①～③の主体は学生であり、a～iの主体は教師である。

- a. 文に節が埋め込まれていること及び語順の変化(日本語で修飾節が前置型であること)などを含めた解説をする。
 - ①修飾語を正しく活用させ、被修飾名詞と結びつける。
 - b. その時点で名詞修飾節で使用可能な様々な表現の例を紹介する。
 - c. 互に関連している単文を提示し、様々な名詞(主語、目的語、関係節目的語など)を修飾したり、節を文のあらゆる位置に埋め込んだりする指導をする。
 - ②教科書における会話や文章で使用されている名詞修飾節を正しく解釈する。

- d.日本語の文章におけるコンテキスト把握ができるための指導をする。
- e.名詞修飾節を自発的に産出する機会を設ける。
- f.名詞修飾節のタイプに関する解説をする。
- g.各タイプとアラビア語の対応に関する解説をする。
- h.日本語への翻訳に必要な省略や拡張ができるようになるための訓練を実施する。
- ③翻訳活動で様々なタイプの名詞修飾節を様々な分野で日本語⇔アラビア語に置き換える。
- i.中級前半・後半で以前より多くの表現を名詞修飾節へ応用できるという示唆を与える。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (Noran Magdy Mostafa)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	准教授	平山 晃司
	副 査	教 授	三藤 博
	副 査	教 授	日野 信行

論文審査の結果の要旨

本論文は、エジプトの国立大学で日本語を専攻する学生たちを対象に、名詞修飾節の習得過程ならびにその過程で彼らが直面するさまざまな問題を精査し、それらを解決する方法を考察したものである。全8章のうち第1章にあたる序論では、基礎段階から中級段階へと進んだ外国語としての日本語の学習者にとって、より難度の高い構文や表現を身に着けるためには名詞修飾節に習熟することが必要不可欠であると説かれる。そして、エジプト人の日本語学習者はどのようなプロセスを経て名詞修飾節を習得するのか、その習得にはどのような難点があり、それを克服するためにはどのような方策が適しているのかを解明することが、本論文の主たる目的として提示される。

第2章では、日本語・英語・アラビア語それぞれの名詞修飾節の特徴や各言語間における表現の連関を明らかにするため、修飾節の特定のしやすさ、修飾節と被修飾名詞の関連性、修飾節の明示性という三つの観点を軸として、これら三つの言語における名詞修飾節を比較対照している。その上で、日本語のどのような名詞修飾節がアラビア語の関係節に置き換えられうるのか、関係節への置き換えが不可能な名詞修飾節はアラビア語でどのように表現されるのかを検討している。

第3章の前半ではエジプトの複数の国立大学で日本語を主専攻とする学生たちの学習動機や意識（得意なタスクと不得意なタスク等）を、アンケートを通じて調査している。後半では各大学の日本語学科のカリキュラムの実態を調べ上げ、翻訳が特に重視されていることを明らかにした上で、翻訳学習が孕む問題点を洗い出し、それらの解決策を次のように提言している——日本語とアラビア語の対照研究を進め、翻訳練習の際に英語を媒介とすることを徐々に減らすべきである。また、初歩の段階では日本語とアラビア語に共通の構文や表現法が豊富に含まれている文章を主たる教材とし、時事問題を扱った記事や、多くの専門用語を含む法律や科学などに関する文章の翻訳は、基礎固めを終えた後にカリキュラムに組み込むのが至当である。

第4章ではまず、日本語の名詞修飾節はどのような過程を経て習得されるのか、習得を困難にする要因は何かを検討され、次の二つの指摘がなされる：(1) 学習者は名詞修飾節の構造よりもむしろ意味を重視し、最も関係節化しやすい表現から習得し始めるわけではない。どのような意味を持つものが優先的に習得されるかは教科書に大きく左右される。(2) 名詞修飾節の習得を困難にする最大の要因も教科書である。基礎段階において教科書で扱われる名詞修飾節はいわゆる内の関係節のみであり、中級段階に進んでから改めて名詞修飾節を取り上げる教科書は半数程度で、解説も不十分である。次に、前章での調査結果を受けて、翻訳学習が外国語の習得にどのような影響を及ぼすかが考察され、翻訳は語彙力の増強や文法意識（grammar awareness）の涵養といった良い効果をもたらしうるが、カリキュラムへの導入にあたっては母語への過度の依存を抑制するための配慮が必要であると結論される。

第5章では、使用される教材が名詞修飾節の習得に及ぼす影響として次の二つが指摘される。一つは教科書で扱われる名詞修飾節の大部分が辞書形・タ形・ナイ形のいずれかを用いたものであり、別の課で既に学んだ受け身・可能・使役などの表現はほとんど用いられないため、学習者の応用力が養われず、表現の幅が自ずと制限されてしまうこと、もう一つは名詞修飾節と明記した上で解説を行う際に関係節以外の表現を用いている教科書が皆無であるため、学習者が「名詞修飾節は関係節を用いて訳さなければならない」という固定観念に囚われてしまうことである。

第6章では日本語学科の3年生と4年生に日本語→アラビア語およびアラビア語→日本語の翻訳タスクを課し、彼らが日本語の名詞修飾節をアラビア語に置き換える際、関係節、イダーファ（名詞の属格による名詞限定）、前置詞句、接続詞を用いた表現の四つの中から最も適切なものを選ぶことができるか、また上記のアラビア語の表現のうち関係

節を除く三つを正しく日本語の名詞修飾節に置き換えることができるかを調査している。さらにフォローアップインタビューを実施し、誤答の原因を突き止めるとともに、名詞修飾節に対する意識についても質問している。調査の結果、関係節以外の表現を用いるのが自然な場合でも名詞修飾節を何とかして関係節に置き換えようとする傾向が見られた。また、教科書で取り上げられる頻度が最も低いタイプの修飾節を含む設問の誤答率が最も高かった。ここにも前章で指摘された教材の影響が看取される。

第7章では、第3章～第6章における考察を通じて浮き彫りにされた名詞修飾節の習得をめぐる諸問題をいかに解決すべきかが総合的に検討され、どのような段階を踏んで指導し、学習するのが有効であるかが提言される。

第8章では、本論考のまとめならびに今後の課題と展望が述べられる。

アラビア語の母語話者を対象としたこのような研究は過去に例が無く、本論文は極めて独創性に富んだものである。エジプトの国立大学日本語学科のカリキュラムおよびそこで使用される教材を網羅的かつ綿密に調査してそれらの孕む問題点を剔抉し、現役の学生らを対象に粘り強く取材を重ねてデータを集め、それらに基づいて現実的かつ有益な改善策を提言している点は高く評価できる。惜しむらくはインタビューの結果を記す際、それが発言を忠実に訳したものなのか要約なのか明示されておらず、またイダーファという構文についての説明がアラビア語に暗い者にとっては不十分であるが、それらは微々たる瑕疵であり、本論文の価値を些かも損なうものではない。以上の諸点から、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。